

## 幼小接続カリキュラムを活用した保育と授業の実践

小野章江・柴垣登・千葉紅子・餘目陽子・渡邊奈穂子・山本唯・川村真紀・吉田美奈子\*、

中村好則・菅原純也・渡辺清子・白石円・市川あゆみ・遠藤真央\*\*

\*岩手大学教育学部附属幼稚園、\*\*岩手大学教育学部附属小学校

(令和4年3月14日受理)

### 1. はじめに

幼稚園においては、園生活全体を通して、幼児に生きる力の基礎を育むことが求められている。そのため、幼稚園教育の基本を踏まえ、小学校以降の子供の発達を見通しながら教育活動を展開し、幼稚園教育において育みたい資質・能力を育てていくことが大切である。

幼児教育では「知識・及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱から構成される資質・能力を育むこととされ、幼児期と児童期の教育活動は、双方の教育活動のつながりを見通しつつ、展開することが必要である。そのために連携・接続の体制を作り、接続を意識した教育課程の編成・実施を行いながら連携を深めていくことが求められている。

附属幼稚園と附属小学校は、折に触れ多様な連携をしたり、年4回の幼小交流活動を行ったりしている。交流活動では、子供も教師も互いに学びある互恵的な活動になるよう、一緒に指導案を作成したり、子供の体験や学びの読み取りを行う機会を作ったり、互いの教育の良さや違いを理解したりしながらよりよい連携になることを目指してきている。

今年度は、昨年度に引き続き、多様な場面の事例を集め「幼小連携カリキュラム資料」ファイルに積み上げていくことにした。また、コロナ禍において直接交流ができない場合においても子供達の活動が継続し、体験や学びが重ねられていくよう幼小交流活動の工夫改善を行っていくこととした。

### 2. 研究の内容と方法

(1) 日々の実践・園内研究会・月毎の指導計画

振り返りから、接続期カリキュラムの具体事例をまとめる。

(2) 今年度の幼小交流活動において、工夫・改善したことについて、その内容を検証し、まとめる。

### 3. 実践

**(1) 日々の実践・園内研究会・月毎の指導計画  
振り返りから、接続期カリキュラムの具体事例をまとめる。**

本園では、5歳児後半の教育課程を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や「知識・及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱から構成される資質・能力で捉え、編成した接続期カリキュラムをもとに、今年度の事例を「幼小連携カリキュラム資料」ファイルに積み上げていくこととした。検討する際は、下記の視点で考察をし、理解を共有した。

#### 【考察の視点】

視点① どのような資質・能力が育っているか

視点② ①を支えるための環境構成や援助

※事例を通して、接続期カリキュラムと照らし

合わせながらどのような資質・能力が育ったか考える。また、新たに挿入・改善する点には\_\_\_\_\_を引く。

なお、この時期のねらいは次のとおりである。

5歳児 10月のねらい

○自分なりのめあてに向かって、考えたり、試したり、工夫したりしながら、やり遂げた喜びを味わう。

○友達と共通のイメージや目的を見い出しながらか遊びを進めていく。

**事例** 5歳児 10月 「飛ぶ矢作り」

F児は、A児、B児とともに、「戦いごっこや鬼ごっこ（ハンターごっこ）」を毎日のようにやっていた。F児にとって、この毎日の遊びは、「いつものメンバーで、いつもの遊びをする安定の遊び」であるが、どこか物足りなさをも感じてしまう遊びなのではないかと感じていた。体を動かさず遊びも好きではあるが、思考を巡らせて取り組むことにも関心が高いF児である。そのよさも生かし、手応えのある状況作りができないかと気にかけていた。そのような折に、F児が弓矢作りに興味をもつ姿があり、これを生かしていけないかとかかわっていくことにした。

**①飛ぶ矢を作りたいF児の姿（10月13日）**

年度当初より武将の世界に興味のある年長組たちは、遊びの中でも、日々刀作り、城作りなどをする姿があった。これを受け、9月に行われた運動会でも昔の日本をテーマに行うこととした。運動会の折には、園長先生が扮した殿さまに憧れをもち、自分たちでも兜や鎧を作る姿があった。F児は、まず、ハンガーを使って弓を、広告紙を使って矢を作り、昔の侍の武器に興味をもって遊ぶようになった。弓はビニールテープで自分なりの模様をつけ、ゴムを付けた。矢は、広告紙を丸めて作ったが、なかなか思うような細い矢ができずに、何度も何度も丸めたり飛ばしたりを試していた。矢を作っていると、隣の組のK児が、「紙はちょっと硬くて手が切れそうなのがいいよ。」と教えてくれた。F児は、硬さや厚さに気をつけて広告紙を探しては、矢作りを続けていった。細いものばかりでなく、太い矢、長い矢、短い矢など様々な矢を作り、出来上がると作った矢を上向き・水平・下向きなど向きを変えて飛ばすことにも興味が広がった。しかし、なかなかうまくいかず「すぐに落ちるんだよな。」と残念そうにしていた。教師はそんなF児の姿を側で見ながら、まず一緒に矢作りをしてみることにした。一緒に作りながら、「太い矢だと進まない？細い矢だと軽くなる？どんな矢がよく飛ぶかな？」などと呟いてみた。そんなF児と教師のやりとりを見た周りの子も少し

ずつ矢作りに取り組み始めた。仲間が増えると、より多様な矢ができ、できたものを飛ばし始めた。教師も、一緒に矢を飛ばす実験を繰り返し、気付くともう片付けの時間になるぐらい真剣になっていた。

**【考察】**

**視点①どのような資質・能力が育っているか**

・「遠くまで飛ぶ矢を作りたい」という、自分なりのめあてを持って取り組んでいる。

【自立心、学びに向かう力・人間性等（目的を持つ・粘り強さ）】

・遊びの目的（飛ぶ矢を作りたい）に合わせて物を選んだり、使ったりする姿が見られた。

【思考力の芽生え、思考力・判断力・表現力の基礎（予想・比較・確認）】

・自分なりのめあてに向かって、考えたり、試したり、工夫したりしながらあきらめずにやり遂げようとする姿が見られた。

【自立心、思考力の芽生え、思考力・判断力・表現力の基礎（試行錯誤・工夫）、学びに向かう力・人間性等（粘り強さ）】

**視点② ①を支える環境構成と援助**

・当初より、日々子供が興味を持ったことを捉え、教師も一緒に楽しみ、支えてきたことが、F児の新たな興味関心を引き出すきっかけにつながっていったと感じる。

・鬼ごっこを繰り返す姿を気にかけて、十分に満足しているものかF児の内面理解をしようとし、教師なりに課題をもち、F児をよく見て、その興味関心のありかを捉える大切な援助となった。

・矢作りにF児が没頭していく姿を見取り、教師も一緒に試行錯誤しながら作ったり、F児が遊ぶ中で矢が飛ぶために工夫できる視点に気付いたりしていくようかかわり、知的好奇心をくすぐり、F児の夢中になる状況を支えた。

・F児と教師がやりとりをしながら矢作りをしている姿から、周りの友達へも興味が広がって

った。それにより、周りの友達とF児がつながり、それぞれ考え合いながら遊ぶ状況となった。

## ②F児の試行錯誤する姿(10月22日～26日)

10月中旬になっても、F児は、弓矢を作って遊んでいた。また、他の子供達も、和菓子作りや城作りが続き、武将への興味はつながっている様子だったので、これらを生かしながら、学級や学年がひとつになって取り組んでいけるような活動に繋げられないかと考えた。そこで、共通の目的に向けて仲間と協同して遊ぶ楽しさが重ねられるよう、「たんぼぼ・きくまつり」を提案してみることにした。

「たんぼぼ・きくまつり」についてクラスに投げかけると、“おまつり”のイメージやワードからF児は、弓矢を作って遊んでいたことが生かされる「しゃてき」を思いつき、早速「しゃてき」が楽しくなるよう、考える姿があった。

「しゃてき」をするには、まず、何を的にしようかと考え、初めは、「ブランコの支柱に、大きなのをぶら下げればいい。」と園庭にくり出した。高い所につるしたところ、「矢がうまく飛ばない。だから、あまり高い所では難しい。」ことに気付き、おまつりに招待する小さい組のことも考えながら、園庭中を探索し、楽しめる場を考えていった。

また、毎日、「小さい組でも飛ばせる飛ばす矢作り」も繰り返し、出来上がると外で試した。「山



の上から木に向けて飛ばしてはどうか。」と教師も少し提案すると、山の上から試したが、木まで届かないこともあった。繰り返すうちに、自分たちの背の高さと同じくらいのところに的があるとよく当たることを発見していた。

また、F児が「小さい組さん、鬼退治して遊んでいるよね。」とふと呟く姿があり、教師が「キー

ワードは鬼？」と返すと、「あっそっか〜、鬼を的にすればいいんだ！」と嬉しそうに話し、みんなで鬼を描くことになった。その中では、自分たちが実際に何度も矢を飛ばすことを繰り返した体験を思いながら、的が小さいと難しいことも話題となり、大きい鬼、そしてやっつけたくなる怖い鬼を描くことにした。翌日、みんなで描いた鬼を持って、森を探索し、「小さい組の背の高さくらいの低い位置がやりやすい。」「小さい組さんは土管の上が好きだ。」など、小さい組の鬼退治の様子を思いながら、プールの柵や土管、木の下などに的を配置した。



## 【考察】

### 視点① どのような資質・能力が育っているか

・“まつり”という言葉のイメージと自分が楽しんでいる弓矢の遊びをつなげ「しゃてき」を考え出していた。教師から投げかけられたものだが、物事をつなげ思考し、主体的にかかわる姿になっている。

【自立心、思考力の芽生え、学びに向かう力・人間性等(主体性)】

・「しゃてき」遊びとのかかわりの中で、知的好奇心や探求心を持ち、気付いたり考えたり予想したりすることを楽しんでいる。

【健康な心と体、思考力の芽生え、言葉による伝え合い、思考力・判断力・表現力の基礎(予想・予測・比較・確認)、学びに向かう力・人間性等(好奇心・探求心)】

・小さい組が楽しめるためにはこうしたらいいかもと考えながら、他者の気持ちや状況を理解した上での共感や思いやりのある行動を取っていた。また、より楽しくなるように根気よく取り

組んでいる。

【自立心、協同性、言葉による伝え合い、社会生活とのかかわり、学びに向かう力・人間性（思いやり、粘り強さ）】

### 視点② ①を支える環境構成と援助

- ・運動会後も和の世界に興味をもち、遊ぶ子供達の姿を生かし、“まつり”ということ投げかけたことは、F児も含め、子供の心を動かし、遊びの活性化につながるきっかけとなった。
- ・教師は、子供達が試行錯誤する世界を先んじるのではなく、子供の言動をよく見取り、一緒になって遊び楽しみながら、考えが広がっていくようなタイミングを捉え伝えることで、考える視点を子供達が持っていった。
- ・矢の工夫に重点が置かれたが、弓も工夫していくことで、もう少し飛ばすことができたのかもしれない。また、弓と矢の最適な関係を教師もさらに教材研究しておくことが必要であった。

### ③やり遂げた気持ちを持つF児（10月28日）

おまつり当日、自分たちが作った「しゃてきコース」を小さい組さんができるかどうか、楽し



んでくれるかどうか、始める前は少し不安な表情を見せるF児だった。最初に来たお客さんはほかの友達に譲り、やりとりする仲間の姿を見ながらだんだんに「よし、自分もやるぞ！」と心を決め、恥ずかしそうにしながらも案内を始めた。年少組、年中組に合わせてコースを歩き、しゃてきをした。弓矢の持ち方や飛ばし方など、小さい組の様子を見ながら、言葉で伝えたり、手を添えたりして教えた。

F児が一周してきた時、教師が「しゃてきをやりたいお客さんが来てるよ。」と声をかけると、さ

っと人数分の弓と矢をもちスタートの山の上を走っていった。そして、張り切って、ゆっくりとコースを案内しながら鬼退治に向かった。弓と矢の使い方を、自分ではわかっている小さい組にわかるように教えるのは難しく苦勞しているようだったが、「自分の力のできる」という思いを持ってほしかったので、できるだけ見守っていた。案内して戻ると、安心と満足の表情いっぱいの笑顔になっていた。



### 【考察】

#### 視点① どのような資質・能力が育っているか

- ・恥ずかしさやうまくいかなど色々な思いや心配がある中、なかなか動けずにいたF児だが、友達の様子を見ながら徐々に、自分がしなければならないことを自覚し、自分の気持ちを調整して動き出している。

【自立心、学びに向かう力・人間性（葛藤、自分への向き合い）】

- ・小さい組に寄り添う難しさがあるものの、相手の動きやつぶやきに心を向け、自分なりのかかわり方を見出している。

【道徳性・規範意識の芽生え、思考力・判断力・表現力の基礎（言葉による伝え合い）学びに向かう力・人間性（思いやり）】

- ・友達と一緒に共通の目的に向かって、役割を分担し、協力してやり遂げた満足感を味わっている。

【協同性、学びに向かう力・人間性（目的の共有、協力）】

#### 視点② ①を支える環境構成と援助

- ・なかなか動き出さないF児の姿は、少し予想していたのとは違ったが、彼なりに動き出す機会を大事にしたいと思い、他児の姿を見たり、一

周回ってきたりする姿を受け止め見守った。子供の気持ちを察し、少し待ってからお客さんの情報を伝える声掛けをする間合いをとったことも、F児のやる気を無理なく引き出すことにつながった。

- ・小さい組とのかかわりにより、より相手の立場になる必要性が引き出された。大変さもあるが、自分なりにかかわりを考えて判断し、行動するという相手を思いながらの柔軟な姿につながった。意図をもち、子供の育ちを考え、このような他学年とかかわる状況作りの大切さを感じた。
- ・これまで、このような異年齢を招待する活動は屋内でやっていた。しかし、日頃の遊びが園庭の環境の中で楽しまれていたことを生かしたことで、空間を新たに見立てその環境のもつよさを考えたり、楽しむ可能性を広げたりする機会となり、子供達の遊びの充実感を支えていた。

## (2) 今年度の幼小交流活動において、工夫・改善したことについて、その内容を検証し、まとめる。

当初、年間での活動を予定していたが、コロナウィルスの感染状況もあり、それが落ち着いたあたりを見計らい、12月に第1回目の交流を行い、2月に2回の活動を計画した。

「幼小連携カリキュラム資料」をもとに活動内容を検討した結果、年長児のこの時期のねらいと1年生の生活科のねらいと内容を生かした「めんこ遊び」をすることとした。

短期間の中でも、子供理解を重ねられるよう、それぞれに取り組んだり、一緒に活動したりを重ねる中での子供の姿を交流し、理解することとした。子供の姿の違いや共通することから資質・能力を読み取ったり、つながりを考えたり、教師のかかわりや環境構成の工夫を交流していくこととした。

### 【エピソード】

12月下旬に、第1回の幼小交流活動を行った。幼小交流では、主な活動として福笑いとめんこを

ペアの友達と行った。初めての幼小交流だったので、幼児はとても緊張している様子だったが、アイスブレイクとして行った「福笑い」を通して徐々に緊張がほぐれ安心して活動することができた。

「めんこ」では、ペア同士遊び、まず小学生が幼児にやり方を教え、それを真似して遊んだ。何度



かやっていた小学生も初めての幼児もなかなかめんこがひっくり返らず、悪戦苦闘していた。

冬休み明け、幼小交流で行った「めんこ」遊びを園内でもできるような環境構成をした。第2回の交流活動では、ペアでのめんこ対決ができる情報も伝えた。対決する日までの間、よりひっくりかえるめんこ作りが始まった。厚紙や段ボール紙を用意した。段ボールを重ねてガムテープで貼るなど、試しながら製作する姿があった。もともとあるめんこではひっくり返せなかったが、段ボールめんこを投げると「10まいひっくり返った～」とコツを掴む様子があった。段ボールが1枚の時と2枚の時を比べると、「2枚の方がいいみたい」とか、「なんでかな？」と教師が問いかけると、C児は、「重い方がいいんじゃないか？」とか「もしかして大きい方がいいのかな？」「風があるとひっくり返る」など話していた。片手で投げの子がほとんどの中D児は、両手で投げ落としていた。また、E児は、「座ってから（低い位置から）投げたらいいんじゃないかな？」など、めんこそのものの改良のみならず、投げ方にも工夫が見られ、試行錯誤がつづき夢中になった。

### 【考察】

#### 視点① どのような資質・能力が育っているか

- ・第1回幼小交流活動で仲良しになった、小学生との交流を通して「めんこ」という新しい遊びに出会い、教えてもらうことで、安心感の中で主体的にかかわり、遊びや活動に夢中になった。

【健康な心と体、社会生活とのかかわり、学び

【向かう力・人間性等(安定した情緒、意欲)】

- ・めんこを自分で製作し、めんこ遊びをしていく中で、めんこの重さ、投げ方、ひっくり返る時の状況等、知的好奇心や探求心を持ち、気付いたり考えたり予想したりすることを楽しんでいる。

【思考力の芽生え、思考力・判断力・表現力の基礎等(予想・予測、比較、確認)】

## 視点② ①を支える環境構成と援助

- ・ペアで伝えたり、遊んだりする状況を作ったことで、はじめてでも徐々にペア同士で安心してやりとりをする姿につながった。その関係の中で、これからやる「めんこ」と出会う状況にし、めんこへの関心も高めた。
- ・1回目の交流活動で楽しんだ「めんこ」を休み明けも楽しめるように環境構成をした。また、自分達のペースで作れるような環境作りをしたことで、ゆっくり試行錯誤しながらめんこ遊びの楽しさに気付き、意欲を持ちながらかかわる状況となった。

## 4. 成果と課題

### (1) 成果

- ・5歳児Ⅲ期の事例を園内で検討し、接続期カリキュラムと照らし合わせながら、あらためてF児の遊びの中の体験や学びを理解した。接続期カリキュラムに載せている体験の深まり・広がりを読み取ることができた。また、その体験を支えているのは、教師が幼児の楽しんでいる世界を理解しようと努め、環境構成や援助を考えている点にある。幼児一人一人の心が動かされているところはどこか考え、その体験を次につなげるために援助のポイントを見極めようとした。このような、丁寧な幼児理解からきめ細やかな環境構成や援助が子供達の体験の多様性と関連性を支えていることを確かめることができた。
- ・昔遊びは、小学生にとってはこの時期の単元につながり、幼稚園としては、今年度の年長児の日々楽しんでいる遊びのテーマとのつながりが

あり、互いに興味を持ち、心を動かすことができるものであった。また、短期間ではあるが、3回同じ活動に取り組むことで、それぞれの日常の遊びや学習でも行ったり、一緒に行ったりなど、活動を重ねていくことができ、活動を単発に終わらせずにつなげることができた。また、仮に感染状況により、交流が実現しなくても互いの取り組み状況を交流したり、教師同士もそれぞれの様子を伝え合ったり、子供の体験や学びを理解することができる幼小交流活動になった。

### (2) 課題

- ・接続期カリキュラムの内容を園内でもう一度検討し直し、今後どのような事例を増やしていく必要があるか考えた上で、「幼小連携カリキュラム資料」ファイルに実践を積み上げていく。
- ・今後も豊かな実践が展開していくよう、幼児の内面に寄り添いながら、幼児理解に努め、そこから環境構成や援助を考えていくような、質の高い保育の実践を目指していく。
- ・幼小で「接続期カリキュラム」を一体的なものにするよう、今後も小学校との連携を図っていきたい。

### 【参考・引用文献】

- 1) 幼児教育じほう 2017. 5より  
無藤 隆「論説 幼児教育の新しい姿から小学校教育の接続を見通す」  
奈須 正裕「論説 幼児教育と小学校教育の接続—学びの履歴をつなぐとは—」
- 2) 初等教育資料 2019. 10
- 3) 令和3年度岩手県国公立幼稚園・こども園教育研究大会 第3分科会資料
- 7) 幼稚園教育要領解説
- 8) 幼児理解に基づいた評価
- 9) 資質・能力の整理イメージ(たたき台) 幼児教育部会